

庄の変化型から本邦をAからLまでの12の型に分けることができた。その分布状態を第5図に示す。次に第5図に示した12の型の中、代表的な11の型を第6図に示した。蔵原(A)、鹿児島(B)、名瀬(C)をみると、11月2日に気圧が最高となり、気温、湿度、雲量が最低になっている。このことは大陸からの寒気が流れて来ていることを示している。3日になると暖気が侵入して来ている。

境(D)、前橋(F)、東京(F)、秋田(I)、札幌(K)は3日にいずれも気圧が最高になり、気温、湿度が下がって雲量が減少し天気が良い。これらは大陸からの寒気による。八丈島(H)はこの寒気のほぼ南限と考えられ、最高気圧は2日に現われている。4日になると根室(I)では最高気圧となっているが、本邦の大部分は気温、湿度、雲量が増加して暖気の侵入と共に天気が崩れたことを示している。

暖気の侵入した模様は等温線図の解析からも明らかにされる(図省略)。

## § 7. 結 論

以上の結果から、11月3日のシンギュラリティーは本邦の南岸、九州、奥羽の三陸側を除く、それ以外の本邦全体に発現し、特に関東地方、中部地方が著しい。そして好天気は南から北上しており、前日の2日には本邦南岸、九州地域にみられ、そして4日に本州内陸の松本に見られた。

そして11月3日のシンギュラリティーは大陸から流れ出した寒気が移動性高気圧となって本邦を覆う結果生ずる現象であることが分った。

終りに終始御指導を賜った長尾隆教官に深謝すると共に種々有益な御援助を戴いた長友島田芳夫技官に感謝します。なお、資料に関してはその多くを中央気象台統計課に御厄介になった。併せて感謝致します。

## 地区だより

今月から本誌上に「地区だより」を設置し、各地区編集委員にお願いして、各地区の特色ある学会活動を報告することになった。

### 関西支部

#### 一防災気象に関する講演会一

最初に当って関西支部の生い立ちを述べておきたいとします。当支部は設立以来第3年目を迎えた所ですが、会員数は設立前の倍近くに飛躍的増加をなし、今日迄に多くの成果を収めて来ました。支部の主な事業は年1回の支部総会と毎月の例会であります。この月例会は毎月テーマを定めてシンポジウム形式で行っています。そして当支部の自慢とする特色はこの月例会を支部の中心地である京阪神だけでなく、各地を巡回して知識の交流を図っていることでもあります。中央への出張のままならぬ地方の会員からこの巡回月例会は非常に喜ばれております。この2年間に高知・高松・広島・米子・舞鶴・奈良・和歌山の各地へ出かけて行きました。この月例会は原則として「ゼミナール」と「一般講演」とを行っており、前者は外国文献の優れたものを紹介して会員の基礎知識の増大と研究方法の習得を目的としております。一方後者はその時のテーマに関係ある専門家を広く会員外からも招いて行っています。

さて去る6月9日には月例会は海を渡って再度高松を訪れました。午前中のゼミナールでは高松地方気象台の合田勲・吉野格両氏が対流圏上部および成層圏の天気解析に関する論文を紹介し、最近観測資料の増加とジェット機の発達によって問題となって来た高々度の気象について討論がなされ、特に「昔の気象学においては圏界面近くの雲が地表の天気と先行する前兆として重視されたが、現在これ等の上層雲と地表の天気現象との間の関連をどのように考えるべきであろうか」といったような問

題が中心話題となりました。昼食は観光バスで高松城玉藻公園迄出かけ、370年前の城の一部や宝物を見学して頭を休めた後、午後の「防災気象」に関する一般講演に入りました。

気象台や大学関係者の他に交通・電力・塩田の関係者やその他合わせて70~80名も集り、熱心な討論が行われ、気象関係者と一方他の分野の人達が互いにこのような会を如何に希望し合っているかということが良く分りました。四国電力の成松清氏が四国地方での電力関係の事故とその原因についての詳しい統計結果を示され、われわれは台風や雷の被害が如何に大きいかを再認識したのですが、出水雅善氏(高松地方)の雷雨の研究報告は気象台側が大いに協力しようとしていること示しました。成松清氏(四国電力)の送電線用碍子の塩害に関する報告は近く四国と本土を結ぶ海洋横断線が計画されている現在重要な発表であり、大坪敬吉氏(徳島側)の鳴門海峡付近の海難に関する統計資料の解析や武市亀治氏(高知側)の比較的弱い南風がトンネルに吹き込むための列車事故の研究および対策の発表等は気象台側が交通関係者と協力して事故を減じようとしている努力の成果であります。三重大学教授川原琢磨氏の防風牆に関する実験的研究および秋山敏夫氏(松山側)のやまじ風の研究は農業災害防止にとって重要なもので、今後の成果が待たれるものであります。さらに建造物の風災に関して先ず光田寧氏(京大)は暴風時の風速の高度分布に関する在来の諸研究を比較検討し、京都大学防災研究所石崎潑雄博士は如何なる種類の風に依って如何なる種類の建物が被害を受けるかを要領よく話して頂き気象関係者には大いに参考となりました。かくして全講演を終了し、高松を一望の下に見渡す琴参ビルで懇親会を行い、今後益々密接に連絡して防災に努力することを打合せて散会しましたが、さすがの梅雨空も恐れをなしたか前後合わせて3日間晴天であったことは芽出度いことであります。